

仏の願い

平成24年 西雲寺だより 立春号(25号)



道徳いくつになるぞ
道徳念仏もうさるべし

これは京都の勸修寺村の道徳というお弟子が蓮如上人の元へ正月の挨拶に行つたとき、上人が言われた言葉です。

道徳は既に八十を過ぎていたと思われませんが、ありきたりな正月の挨拶に、聖人ははがゆい思いをされたのです。

道徳は上人の前へ出て念仏を称えていたのでしよう。しかしその念仏はいつものように信のない口先だけの念仏だったのです。上人は日頃からそのことが気がかりだったので注意をされたのです。八十を過ぎて信のない念仏を称えていてそれでよいのか、年を重ねてめでたい意味がないではないかと諭されたのです。私たちはこの上人のお諭しを自分のことといたただいて、弥陀をたのむ信の上の念仏が、心新たに申せるよう念法をいただいでいきましよう。

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

異義

親鸞聖人の晩年において、最も心を悩ましめたのは、京都へ帰られた後、関東において広がった異義でありました。異義とは親鸞聖人が説かれた教えに背いた教えを説くものが門弟の中に出てきたのです。その為、御同行の中に疑いや惑いを生じ、また反社会的な行為をなし、批判を受けることもなつたのです。

聖人が亡くなって三十年程たつて後、唯円坊というお弟子が、当時関東に広がっていた異義を歎き悲しんで『歎異抄』というお聖教を書き残して下さいました。それは前半十条は、唯円が聖人より聞きとどめた正しいみ教えを、そして後半八条は、それに背いた異義について書いています。その前半部分の最後第十条は

「念仏には無義をもつて義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき

というおことばで結ばれています。

ここでいう「無義」の義とは、私たちの知恵による分別、計いです。そして「義とす」の義は如来のおぼしめしという意味です。念仏は如来さまのおぼしめしであり、私たちははからいなく「ただ念仏」させていただくことが如来のおぼしめしであり、

ご本願をいただいでいく姿なのですと示してくださっています。聖人は「ただ念仏して、弥陀にたすけまいらすべし」とはからい無しの深い自覚の世界を生きておられました。それに反して私たちはお念仏申しても「こんな私でよいのだろうか」とか「もう少し立派な人間にならなくては」といふ人なはからいや思いが生じて無義（はからいなし）にはなれないのです。

異義とは

私たちは聴聞しても、義（分別、計らい）をさしはさんでしか聞くことができません。自分の都合に合わせて聞いているのです。そこに誰でも異義者になる可能性をもっているのです。

異義とは自分の聞きぢからでもつて、自分の聞いたことに義をたてる、つまり自分の聞いたことは正しいことであり、ほかの人の聞きかたは間違っている主張することです。このことによつて共に聴聞してきた御同行を惑わし、疑いを生じさせ、お念仏者の集団（サンガ）を乱すこととなるのです。

いつの時代にも存在するのですが、聖人の晩年、関東において念仏者のなかに、正しい仏法に背く異義をとなえる者が出てきたのです。

関東には、各地に直弟子を中心とした念仏集団ができていました。代表的なものは、真仏、顕智を中心とする高田門徒、性信（しようしん）を中心とする横曽根門徒、順信を中心とする鹿島門徒等です。聖人上洛後、これらの念仏集団は指導者のもと、お念仏

のみ教えに生きてきたのですが、悲しいかな、親鸞聖人という存在を失つて十数年たつと各地で聖人のみ教えに背いた異義をとなえる者がでてきたのです。各地の指導者たちは、異義をとなえる者を正し、疑問を生じた時には、京都の聖人に手紙を書いて教えを請い、時には上洛して直接教えを聞いて、関東にはびこる異義をおさめようといふ力を尽くしたのです。しかしやがて獅子身中の虫のように異義が関東の教団をむしばんでいったのです。人間の罪の深さ、そして聖人の悲しみを感じざるをえません。

異義の代表的なもの

○一念、多念

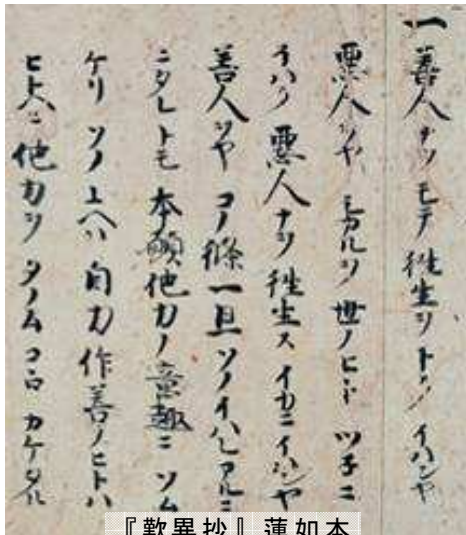
この異義は法然上人の時代よりあったものです。一念義は信心に重きを置き、念仏を軽しめるものです。弥陀の本願にめぐめ、一念の念仏をとなえればそれで救われると説き、その後の念仏の必要性を説かないのです。そして一度ご本願を信ずれば、弥陀の本願はどんな罪深い悪人でも救つて下さるのだから、悪いことをしてもかまわないという立場です。これは初一念の信心の大切なことは分かりませんが、それで一生貫くことはできないでしょう。一念の信心がまことならば、その信心は称名念仏となつて私たちを導き、常に初一念の信心に立たしめて下さるのです。この一念義の異義は念仏を軽しめると共に造悪無碍（ぞうあくむげ）の異義が生じる危険性ははらんでいません。多念義というのは一念義と反対で本願にめぐめる信心よりも念仏を唱える方に重きを置くものです。弥陀の本願は念仏をと

えるものを救うと誓って下さっているのだから一声でも多く、一念よりも十念、十念よりも百念と、一生涯念仏を唱え続けることが本願にかなうことだという主張です。これは折角他力念仏のみ教えに出遇いながら、自力聖道門の自力の世界を離れることができないで、念仏を善根功德として唱えているのです。私たちはご本願に目覚める他力信心のよろこび無くしてどれだけ念仏唱えても虚しいのではないのでしょうか。

○造悪無碍、専修賢善（せんじゅけんぜん）

この二つの異義は正反対の異義ですが、

聖人の晩年、関東の教団を大混乱におとし入れたものです。造悪無碍の異義は『歎異抄』第三条に説かれている「悪人正機」の教えを曲解したもので、如来の本願はどんな悪人でも救って下さるのだから、悪を犯してもかまわないのだ、返って悪を犯すことが本願にかなうことだという極端な異義です。親鸞聖人もこの異義には心を痛められて、お手紙の中に「薬あればとて毒を好むべからず」と戒めておられます。これは如来の本願を我身にいただいて廻心懺悔することなく、横着にも我身の都合のよいようにご本願を解釈し利用したものです。この造悪無碍の異義によく似たものに「本願ぼこり」というものがあります。本願ぼこりとは、どんな悪を犯しても往生の障りにならないのだ。



蓮如本 『歎異抄』

如来さまは必ず救いとおして下さると本願に甘えることです。これは極端になると異義となりませんが、ご本願のころを深くいただいて、我身を懺悔し、ほればれと弥陀に甘えるというのなら異義とはいえないのです。

造悪無碍の異義とは正反対にあるのが専修賢善の異義です。これも「悪人正機」というご本願のおこころを正しくいただけないところから出てくる異義です。如来さまは悪人をあわれんで、やむなく悪人正機のご本願をおたてになつたけれども、やはり本心は悪をつつしみ、善をなすものを救つて下さるのが本願のおこころであるから、

我々は悪を犯さず、お念仏を唱えなければならぬというものです。これは一見正しいように思えますが、本願に出遇った深い自覚と信心のよろこびがなく、道徳化して宗教性を見失っているのです。

悪人正機とは

『歎異抄』第三条は「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という有名なことばで始まっています。この善人、悪人は今日理解しにくいことばですが、世間一般に使われている善人悪人ということではありません。悪人とは人生を生きる上において、煩惱に悩み苦しみ生業（なりわい）にお

いて殺生をすることに深い罪悪感をいだき、救いを求めている人々のことです。弥陀の本願をたのみ、念仏申している人たちです。親鸞聖人は、

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずといわれますが、この凡夫ということが、悪人ということに通じる言葉です。

それに対して善人は「自力作善（じりきさせん）の人」と表しています。つまり自分の力量で悪をやめ善行を励んで、苦しみや悩みを超えていけると思っている人たちです。この人たちは、弥陀の本願を必要としない人、他力をたのまない人たちです。

第三条には続いて

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなることあるべからざるをわれみたまいて 願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり

とあり、弥陀の本願は、自分で悪をやめ善をなすことができる人たちのためではなく、いかにとも生死をはなれることのできない悪人のために起こされたものであるから、「他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の生因なり」

と、弥陀をたのみ悪人としてのめざめが、往生の道を歩むにおいて最も大切なことであると示されているのです。（住職）

此の度、西雲寺様に絵画「冬河」百号の油彩画作品を寄贈させていただきました。平成二十三年十月十七日朝、この作品を井ザワ画房のトラックに積んで、宝永の自宅を出発しました。家を出るとき、特別な思いに駆られていました。西雲寺に嫁入りし、飾っていただけで、有り難いという思いと、武周に向かう途中、この絵のモデルとなった場所に出会うからです。その場所は清水町の久喜津橋から眺めた所です。遠くの山並みを望む日野川の風景です。

トラックがその橋を渡るとき、ここを絵にしようと思ったときの衝動が蘇ってきました。もう二十何年も前のことです。「激しく降り続いた雪も止み、群青の河が、一面、銀世界の中を分け入るように滔々と流れている。やがて空が明るくなる。河面は微妙な色合いの光を放ちながら河の流れに合わせて揺らぎ輝いている。雪原は光を受けてプリズムを放ち、河と河岸でじつと佇む裸木のシルエットを包み込んでいます。…」

心に強く刻み込まれた印象的なこの情景を一心不乱に描き込んで仕上げたのがついこの間のように思い出されます。必死に学校のことや絵のことに傾注・没入していた頃のことですが、この絵は油絵の具で、ペインティングナイフという金属でできた、絵を描くためにつくられたヘラでエネルギーギッシュに描き込んだ百号（約120cm×160cm）の大作です。

この絵は毎年秋、東京都立美術館で開催されていた公募展一陽展に出品し、高い評価を得ました。（現在この一陽会は東京六本木の国立新美術館にて毎年開かれており、私はこの会の審査員としても、東京に出かけています。）そして、平成元年九月二十七日付け全国紙朝日新聞の文化紙面の秋の公募展特集記号でもこの作品のことが取り上げられました。画家としては、まだ、駆け出しの青二才を舞い上がらせる大変な出来事でした。

二十三年四月に一ヶ月間、福井市松本一丁目のギャラリーサライにて、私としては五回目となる個展に、目玉としてこの「冬河」を特別出品いたしました。その個展に西雲寺様が見に来られ、後光が差すようだとお褒めの感想をいただきました。日頃からお世話になっており、また、いつも展覧会に足を運んで下さっていたので、いつかは作品の寄附をと思っていましたので、良い機会となりました。少しでもお寺様のお役に立つことができ、行く末まで、お参りに来てくださる方々にもかわいがっていただければ幸いです。現在、私は様々なスタイルの洋画にチャレンジをしています。これからも清水独自の表現を求めて一層研鑽して参る所存であります。どうぞ、今後ともご愛顧の程、よろしくお願いいたします。

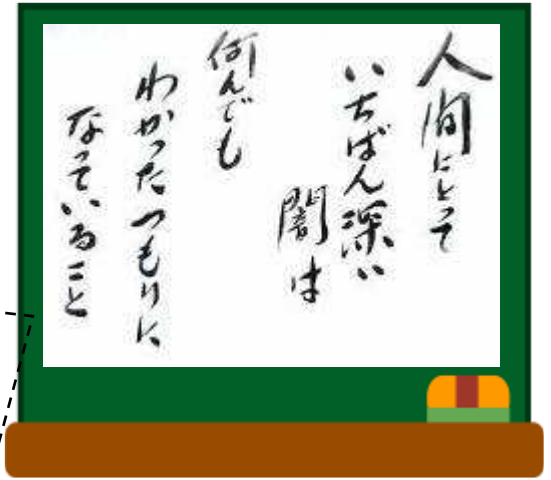
日本美術作家協会会員
一陽会 会員

洋画家 清水正男
福井市宝永二丁目（武周町出身）

寄贈「冬河」



山門掲示板



今日私たちは、ありあまる知識を身につけて生活をしています。子供は小さい時から塾に通って知識を身につけ、大人も新聞やテレビでいろんな情報を得て、知らないことがないほどです。人生の真実ということからいえば、身につけた知識には限りがありますが、そのことに気がつきません。この知識偏重は、自分の思いの及ばない真実に対するところを閉ざしてしまいます。

仏教では、迷いの原因を無明(むみょう)といいますが、無明とは、知識や知恵がなくて何も分からないというのでなく、何でも分かっているつもりになっっていることです。そこには、自己を問い、人生を問うということとは、出てこないのです。(住職)

疑いも縁 納得も縁

☆そういえば、腰も曲がって痛そうやのに、なぜかニコニコしてるお婆さんに出会ったことがあったなあ。

★念仏じゃ頼りないなあ… 老いにはアンチエイジング、病には最新医療、そうやって闘うのが常識やし、格好いいんでは？

意味

念仏が私をおま摂め取る時は常に(なんまんだぶつを阿弥陀さまからの頂き物と喜ぶ時は常に)迷い(生を苦と感じ・老を直視できず・病が苦でしかなく・死の影におびえ・求めても得られず・愛したものの別れを受け入れられず・憎むものとは別れられず・執着が止まらない・そんな四苦八苦)の闇夜が明けるのです。

読み方

せつしゆ しんこう つね しやうま
 摂取の心光、常に照護したまう



『正信偈』に先輩の感動あり！

おつとめの練習会
始めてみませんか？



本堂町で練習会が開かれるのは数十年ぶりだそうです(ただいま現在進行中よ)



武周の練習会のひとこま

初めての方も、聞き覚えのある方も、大切な方のご命日が、正信偈(しょうしんげ)をいただく縁になればなあと思うのです。

お盆・お彼岸・お正月、さまざまなきっかけもありますしね。

3人集まれば、私もご一緒させていただきますので、お気軽にお電話下さいませ。お茶とお菓子で(たまにはお酒で)楽しく練習しましょう♪

(編者)

お寺のお正月



小丹生の方も



殿下の方々のおつとめ



除夜の鐘 となたでも



本堂・末地区の方々



安田地区の皆さん

発行

真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**

住職 護城一寿

筆頭総代 吉川芳弘

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。